ネギま流魂記

赤い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま流魂記

【Ｎコード】
Ｎ３５２３Ｒ

【作者名】
赤い人

【あらすじ】
東方流魂記の主人公、詩音が次の世界へと転生。
生きる目標を失っていた詩音は、とある少女と出会うことで白沢慧としての生を歩み始める。
やっぱり女顔はデフォで、慧涙目。
詩音から慧になるにあたって、若干性格変わっているかもしれないので注意。

――第一章　鬱から躁、始まり始まる――（前書き）

東方流魂記も終わってないのに、こんなの書いてしまったし。
東方終わるまでは息抜き程度なので、進行はあまり期待しないでください。
最初は説明的になりやすいなぁ・・・・・・。

――第一章　鬱から躁、始まり始まる――

ＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉＰｉ！！

デジタル式の目覚ましが鳴り、指定した時間に至ったことを知らせる。

ＰｉＰｉＰカチ・・・・・・。

目覚ましを止め、時刻を確認する。

「午後２時・・・・・・起きるか」

のそのそと布団から抜けだし、備え付けの風呂場へ行く。

服を脱ぎ、適度に筋肉の付いた肢体を晒す。

ふと目に映るのは洗面所の鏡。

かつての義娘と同じ顔つきをした、黒髪黒目の少年が映る。

「慧音」

術で髪色と目の色をその義娘と同じにして笑いかけて見る。

「ハァ・・・・・・」

鏡に映る姿を見て、途方もない郷愁と虚無感が僕を襲う。

それを受け入れ、術を解いてから風呂場に入る。

能力『陰陽五行を操る程度の力』で風呂を入れながら、自身にもシャワー代わりに振りかけ続ける。

今は１９８９年だからボイラーの性能も低くて、すぐに暖まらないから能力で入れている。

それでも、学生寮の個室ごとに風呂場があるだけで贅沢だ。

「・・・・・・」

ザァァァァと、肌を湯が叩く音だけが流れる。

しばらくそのままで居続け、思い出したように体を洗う。

全身を洗い終えた後、少し熱めの湯につかり天井を仰ぐ。

能力『時空間を操る程度の能力』で広げた浴槽の中で手足を存分に伸ばし、未だ残る眠気に身をゆだねる。

「もう・・・・・・・終わりなのね」

「・・・・・・・うん」

輝夜の声に頷く。

「私たちも長く生きすぎましたから・・・・・・本当に永く」

「まったくだ。まあ、詩音や輝夜達と入れたから良かったけど」

「そうだね、僕もそう思う」

永琳と妹紅が感慨深く言うのに同調する。

僕らが寄り添っているわずかな領域を除いて、全ては黒・・・・・・いや、無に染まっている。

――世界の終焉。

いかな不老不死とて、それは世界の中での話に過ぎない。

世界が終われば、その中の全ても終わるのは当然の事。

『陰陽五行を操る程度の能力』という世界操作で、自分たちの領域を崩壊から遠ざけてはいた。

それがほかの領域を塗りつぶす行為だろうと、僕は行ってきた。

銀河系を崩壊から遠ざけ、その領域まで崩壊が狭まれば地球を遠ざけ、そこまで来れば幻想郷を遠ざけ、最後には永遠亭を遠ざけた。

今や残るのはこの一部屋も無い領域だけ、永く共にあった４人で最期の時を待つ。

そのまま崩壊は僕らの足元まで来て、僕らをも飲み込み始める。

だけど僕らに恐怖は無く、ただ最期までを共に在れた事の喜びだけがあった。

「輝夜、妹紅それと永琳・・・・・・皆大好きだよ」

「私も詩音達が大好きよ」

「私もだ」

「ふふ、私もですよ」

当然の事を口にし、皆で笑いあいながら・・・・・・僕らは世界と共に消えた。

そこで目が覚める。

どれだけ寝ていたのか、湯はすでにぬるま湯へとなっている。

ザァと湯からあがり、冷えた空気に体を軽く震わせながら脱衣所に出る。

バスタオルで体を拭き、腰にそれを纏って脱衣所を出る。

麻帆良男子中等部の制服に身を包み、能力で髪を完全に乾かして整える。

前の世界から使っていた、諏訪子から貰った髪紐で後ろ髪を括る。

時計は午後３時２３分を指している・・・・・・まあ、どうでもいいのだけど。

寮を出て散歩を始める。

電車に乗り、最奥の女子部エリアまで向かう。

目的は通称世界樹と呼ばれる、霊脈に植えられた巨大な木だ。

女子部の駅で降り、歩き始める。

駅の時計は４時ぐらいを指していた・・・・・・つまり、下校や部活動に向かう女生徒が多くいる。

一応男子中等部の制服を着ているのだけど、違和感なく溶け込んでしまっている僕がいる。

前の世界でなら落ち込んだりしただろうけど、今の僕にそんな余裕もない。

たぶん今の僕は、死んだ魚のような濁った眼をしてるだろう。

が、それもまたどうでもいいことだ。

世界中の下にたどり着き、軽い音を立てながら頂上付近まで駆け上がる。

見えるのは麻帆良全景、この壮大な風景ですら今の僕には色あせて見える。

前の世界で死に際の紫から譲られた、能力『境界を操る程度の能力』でスキマを開く。

「きゃ！？」

「何か用？」

駅前で僕を見てから付いてきて、近くに潜んで僕を見ていた人外の少女を呼び寄せた。

「そ、それは・・・・・・」

「それは？」

風になびく金髪を押さえ、少女が答える。

「それは・・・・・・お前の瞳が不思議だったからだ」

「それだけ？」

さらに問うと、口を閉ざして悩む。

少し待ってみると、どうやら答えが出たようだ。

「お前に聞きたい事があるから・・・・・・だと思う」

「そう、それは何？」

次の言葉で僕は少し驚かされることとなり、それが僕が変わるき

っかけとなるのだった。

――ｓｉｄｅ　少女――

ナギにここに封じられて一年、光に生きて見ろと言ったナギの真意はいまだ良く分からないままだ。

今日も退屈な授業を終え、クラスメイトから別れのあいさつを受けながら逃げるように校舎を出る。

闇の中で生きてきた、生きさせられてきた私には、ここのガキたちは眩しすぎる。

ただ、そこにナギの言っていたことの答えがあるとは感じられた。

なんだかそれが嬉しくなって、駆け足気味になったところでそれを見た。

艶の無い闇色。

絶望に染まったその目を、この学園で見るとは思わなかった。

学園全体に施された認識阻害の結界で、どいつもこいつも魔法関係者ですら馬鹿に明るい。

が、そいつは対極的だった。

暗く静かで、深く重い。

何故か男装しているそのガキはその瞳のままどこかへと向かう。

気が付けば、私はそいつの跡を追っていた。

何故、何故、何故、何故。

浮かぶのはそれだけで、肝心の疑問が出てこない。

夢遊病者のように歩き、私の瞳はそいつの後ろ姿に焦点を合わせ続ける。

たどり着いたのは世界樹。

軽い足取りでそいつは頂上付近まで登る。

そいつはそこで周囲を見渡し、何か横に線を引いて――

「きゃ！？」

――次の瞬間、私はそいつの隣に立っていた。

「何か用？」

深い瞳で見られ、私はらしくなく慌てる。

「そ、それは・・・・・・」

「それは？」

えっと、その、何だった？

「それは・・・・・・お前の瞳が不思議だったからだ」

「それだけ？」

ようやく出た言葉がバッサリ切られる。

確かに、付けていた理由としては薄い。

何故だ・・・・・・何故？

そうだ、何故かだ。

「お前に聞きたい事があるから・・・・・・だと思う」

「そう、それは何？」

そいつは、ただ深い絶望に染まったその瞳でじっとわたしを見てくる。

いや、違う・・・・・・それは絶望というよりは――

「なんでお前は・・・・・・そんなに年老いた目をしているんだ？」

「！？」

――年老いて、何もかも燃え尽きた瞳だ。

――ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――

「なんでお前は・・・・・・そんなに年老いた瞳をしているんだ？」

「！？」

何故、何故、何故、何故！？

――落ちつけ。

こいつは人外だ・・・・・・僕からすれば子供と言えるレベルでも、歳を取っていることは容易に予想できる。

この時、僕は落ちついたようで落ちついてなかったのかもしれない。

いや、ただ誰かに話したかったのか。

「大切な人が居なくなったから」

「それだけじゃないだろう？」

そう、大切な人を失うのには慣れている。

人間の寿命はあまりに短く、妖怪ですら長くとも寿命があった。

親友、友人や姉と呼んだ人、従者だってそうだ。

永遠。

そう、永遠に共にある・・・・・・いや、あった人と別れて、真実僕が一人でしかないと認識したせいかもしれない。

誰であろうと、世界を超えて僕に付いてくることは適わない。

僕が知る限り、僕だけが永遠の存在。

ぽつぽつと語った、もう出ることも無いだろうと思った涙を流しながら。

「そうか・・・・・私では、少ししかお前の気持ちを理解してやれない。やってやれるのはこの程度だけだ」

静かに抱きしめられる。

ただそれだけなのに、久しぶりに感じた人の温かさに心が温まる。

「失くしたのなら、また手に入れればいい。その間はお前は一人じゃないのだから」

少女の言葉に納得し、小学生ぐらいの見た目の少女に諭された恥ずかしさからちょっと拗ねる。

「結構酷い事を言うね・・・・・・」

「ふっ・・・・・・そんな事は当然だ」

僕が落ちついたと判断したのか、少女は僕から離れて宣言する。

「私は真祖の吸血鬼にして悪の魔法使い・・・・・・エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェルなのだから！」

その堂々とした身ぶりに、少し抜けた吸血鬼の友人を思い出す。

「封印されて、見た目相応の力しかない奴が偉そうにするな」

だから、意地の悪い笑みを浮かべながら言う。

「んな！？　こ、この・・・・・・さっきまで餓鬼のように泣いていた奴が！」

ガァー！！　と吠えるエヴァンジェリン・・・・・・カリスマ（笑）になっているせいで小動物の威嚇にしか見えない。

「！？　・・・・・・またか！？　いったい何なんだあれは！」

「はーい、落ちつこうねエヴァンジェリン」

スキマ落としで胸元に呼んで、後ろから抱きかかえる。

「ガ、ガキ扱いするな！　これでも６００年の時を生きて・・・・・・ああ、くそ！　お前からすればどいつもこいつもガキじゃないか！」

「ははは、エヴァンジェリンは元気がいいなぁ」

子供を扱うように頭を撫で廻し、長く綺麗な金髪を梳く。

楽しい。

楽しい事が楽しい。

モノクロの世界が、色に染まっていく。

完全に前と同じ僕には戻れていないけど、それはそれでいいのかもしれない。

「明日からちゃんと学校行こうかな」

「はっ！　不登校児がいまさら行ったところで、虐められるのが関の山だろうよ」

あらら、子供扱いしすぎて拗ねてしまったみたいだ。

だけど、そういうところが可愛らしい。

「エヴァンジェリン、好きだ付き合ってくれ」

「・・・・・・すまん、少し耳が遠くなっていたようだ。もう一度頼む」

まあ、普通はそうなるよね。

だけど、惚れてしまったものはしょうがない。

「好きだエヴァンジェリン。結婚を前提に付き合ってくれ」

「な・・・・・・な、なななななななななにをををををを!?　馬鹿か!?　狂ったか!?」

おー、凄い慌て様だ。

顔は耳まで真っ赤で、こっちが告白したのに、立場が逆みたいになっている。

「だ、だいたいお前の名前も私は知らないし。私には好きな相手がだな・・・・・・」

「今の名前は白沢（しらさわ）慧（けい）。好きな相手？　すぐに僕に惚れさせてみせるから問題ない」

有象無象が僕に勝てるわけがないじゃないか。

とりあえずエヴァンジェリンの後頭部を抑えて、その額に口づけを落とす。

「なぁー!?　きゅぅ・・・・・・」

「あ、あれ？」

初心だとは分かっていたんだけど、これは予想できなかった・・・・・・。

僕の腕の中で、顔を真っ赤にして目を回してしまった。

柔らかくて良い匂いがするなぁ・・・・・・じゃなくて。

「・・・・・・お持ち帰りしちゃおう」

うん、名案だ。

エヴァンジェリンの家も分からないしね。

女子寮とか記憶を読めばという思考の冷静な部分を無視し、お姫様だっこのまま寮に連れ帰る。

もちろん人に見つかるへまはしない。

ああ、起きた時どんな反応をするか楽しみだ。

――第一章　鬱から躁、始まり始まる――（後書き）

詩音が軽い・・・・・・いや、慧だからいいんだ、たぶん。
ネギまか恋姫で、恋姫書こうって言っちゃったけど、三国志の知識不足で無理でしたすいません。

――第二章　放課後デート、夜のデート――（前書き）

今回バトル？　があるため超理論が展開されてます。
かなりぐだぐだな気がしますが、楽しんでもらえるとうれしいです。

――第二章　放課後デート、夜のデート――

「はふ・・・・・・」

午前１０時２３分、僕は麻帆良男子中等部に向かっていた。

なんでこんな中途半端な時間かというと・・・・・・寝坊しただけです。

最近まで昼過ぎに起きていた僕が、早々８時とかに起きれるわけがない。

「まあ、やろうと思えば起きれるんだけどね」

時間を操るなりすれば簡単である・・・・・・めんどいからやらないけど。

そこまでして、定時で通う気は無い。

「あー、寝むい」

ほとんど人もいなくて、聞こえる音は僕の足音と風の音だけ。

空から降る日差しは柔らかく、無理やりに起床してきた僕を眠りに誘う。

ようやく到着し、玄関で靴を履き替える。

教師の声とチョークが奔る音だけが響く廊下、そこを新品同様の靴音を響かせて歩く。

１－Ａの表札が目に入る。

僕の所属するクラスだ・・・・・・来たのは数回だけだけど。

ガラガラと音を立て、前の入り口から入る。

扉の開く音に何事かと思った教師と生徒が、僕の顔を見て驚く。

「・・・・・・今日は来てくれたのか白沢。席に座りなさい、今は数学の２３ページだ」

「あ・・・・・・今日からは一応毎日来ますんで、よろしく」

僕の言葉に、教室が沈黙し・・・・・・爆発した。

『な、なんだってー！？』

ほとんど全員が席を立つ。

前の僕は我ながら酷い状態で、あらゆる人から不登校になっても仕方ないと思われていたのだろう。

それがすっきりした顔でこんな事宣言すれば、さすがに驚くな。

「と、言う訳でよろしく」

とりあえず人間関係を円滑にするため笑いかけて見たが・・・・・

・頬を染めるな気色悪い。

娘の容姿の良さを喜ぶべきか、自分の女顔を嘆くべきか複雑すぎる・・・・・・。

永琳の知識すら持つ僕にとって授業は容易く・・・・・・つまり爆睡した。

なお、永琳の知識は、世界の終りまで一緒にいたからか輝夜、妹紅、永琳の魂情報も取り込んでいたため使える。

これも鬱の要因の一つだったのだけど、今は皆が傍にいるようで嬉しい。

授業終了の鐘が鳴り、周りが騒がしくなったので起きる。

「・・・・・・12時？」

黒板には英語が書かれている・・・・・・どうやら一授業寝過ごしたようだ。

寝ぼけ頭で呆然としていると、一人の生徒が僕の方にやってくる。

「や、やぁ白沢君。僕と一緒にお昼を食べないかい？」

やってきたのは短めの髪をかき上げた少年だった。

「誰？」

「えっと、高畑＝T＝タカミチっていうんだ。タカミチって呼んでくれると嬉しいかな」

頭を起こして、少年の目をじっと見る・・・・・・どうやら、善意でこの行動を起こしたらしい。

「駄目かな？」

「いや、同伴させてもらうことにするよ。あと、慧で構わないよタカミチ」

無垢なように見えて戦の空気のするタカミチを、友人兼観察対象とした。

「よろしく、慧！」

「ああ、よろしくタカミチ」

終業の鐘が鳴り、ＨＲも終わって１－Ａが解散する。

さっそくタカミチがこっちにやってくるが、残念ながら僕には大事な用がある。

「やあ慧、一緒に帰らないかい？」

「いや、すまない。放課後は用事があるから、遊べないや」

そう言うと、素直に納得してくれた。

「そうか残念だよ。機会があれば、いつか。それじゃあ、さようなら慧」

「ああ、さようならタカミチ」

帰っていくタカミチを見送り、僕も外に出る。

そして小さなわき道に入るのと合わせてスキマを通る。

スキマを抜けた先で人でない気配を探り、目当ての気配に駆け寄る。

「エヴァンジェリン！」

「またか慧！　完全に気配を消して突然現れるな、驚くわ！」

怒られてしまったが、頬を赤く染めているのを見れば照れ隠しだと分かる。

「まったくこいつは。影を背負っていたかと思ったら、これほど奔放な奴だったとは・・・・・・」

「こんな風に接するのは、エヴァンジェリンが初めてだよ。普段

はもっと落ちついてる」

思えば、こんなに積極的になったのは初めてかもしれない。

諏訪子の時は自然と夫婦になったし、輝夜と妹紅の時は受け身だったからか。

つまり、愛することはあっても、恋することは無かったんだ。

「そ、そうか・・・・・・」

「うん、そうだよ」

エヴァンジェリンは人の好意には慣れていないんだろう。

だから初心で、僕が好きだと表現するだけで赤くなってしまう。

まるで中学生のカップル・・・・・・まだカップルではないけど、事実中学生だったね。

ゆったりと歩調を合わせてエヴァンジェリンの隣を歩く。

このまま一緒に帰る（エヴァンジェリンの家まで送る）のもいいけど、せっかくだからデートに誘ってみようか。

「エヴァンジェリン、これから甘いものでも食べにいかない？」

「エヴァでいい・・・・・・勘違いするなよ！　一回一回長いだろうと思ったからこう呼ばせてやるだけだぞ！」

ああもう、何だこの可愛い生物は！

「エヴァ！」

「ちょ、バカ！　いきなり抱き付くな！　って、抱えるな！　おーろーせー！」

後ろに回ってエヴァの軽い体を抱き上げる。

じたばた暴れるけど、実は腕が外れないように動いているのが嬉しすぎる。

しばらくすると諦めたのか、ぐったりと手足を垂らしてしまう。

「・・・・・・もう、好きにしろ」

「うん、そうさせてもらう」

周りに微笑ましいものを見るように見られながらも、エヴァの首筋に顔を埋めて髪の匂いを楽しんだりする。

そのまま駅に向かう・・・・・・前が見えないけど、その程度で怪我するほど僕の感覚は鈍くない。

麻帆良外縁部の商店エリアへの電車に乗り、抱えたまま席に座る。

「エヴァは何が食べたい？」

「・・・・・・和菓子」

エヴァが俯きながらぼそっと言う・・・・・・周りの乗客に見られていればそうなるのも当然か。

それでも体勢を変えないあたり、僕も大概だと思うけど止めない。

ただ、さすがにこれ以上は可哀想なので、駅を出たところで解放する。

「あ・・・・・・」

多少は残念がってくれたようで嬉しい・・・・・・実は嫌われないかとハラハラしていたのは内緒だ。

エヴァの手を取り、もしもの時用に調べておいた甘味所を脳裏にリストアップして、その中から和菓子店を決め先導する。

金はスキル「黄金律A」でありあまるほどあるので、気にしない。

というか、発動させている限り金集めしなくても数十万がポンと手に入る・・・・・世の中の企業戦士ごめんなさい。

「到着！」

「おおっ！　確かここは団子が絶品と言われている店じゃないか！」

隠れた名店だと言う話だったのだけど、エヴァは知っていたみたいだ。

「草餅だ、草餅を食べるぞ！」

はしゃぐエヴァに付いて行って席に座る。

爛々と目を輝かせながら採譜を見るエヴァを見つつも、さっと採譜に目を通して注文を決める。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「「草餅と三色団子と玉露で」」

完璧に被り、店員に微笑ましく見られてエヴァが赤くなる。

「草餅と三色団子、玉露が各お二つずつで宜しいでしょうか？」

「っ・・・・・・！」

「はい、以上でお願いします」

プルプル震えるエヴァが可愛すぎる。

「結構食べたね・・・・・・」

「ああそうだな。あそこの店はこれから贔屓にしよう」

僕の呟きに、満足そうにエヴァが言う。

確かにあそこの店は贔屓にするだけの価値がある。

二人でのんびり歩いていると、エヴァがはっと何かに気が付く。

「今日は私の番だったか・・・・・・はぁ、面倒な」

どうやら面倒事の様で、疲れたように溜息を吐く。

「どうかしたの？」

「お前なら分かると思うが、ここは超一級の霊地だ」

ああ、そう言う事か。

「つまりは侵入者撃退のシフトが今日あると」

「そういうことだ・・・・・・まったく、そのくらい自分たちでどうにかしろというに」

面倒がって入るけど、ここを守ること自体は嫌がっていない。

なんだかんだ言っても、エヴァは優しいのだ。

「じゃあ、僕も手伝うよ」

「ん、そうか・・・・・・お前の実力も見てみたいし、良いんじゃないか。と言っても、早々侵入者なんかに遭遇はしないがな」

そんなにホイホイ侵入者がいたら、どれだけ治安が悪いのって話だよね。

「ホイホイ来ちゃったよ・・・・・・・」

「無駄に壮観だな・・・・・・」

視線の先には魑魅魍魎の群れ、視界には木々とそれらしか見えない。

最初来たのは三十人ほどの退魔師のような連中だったのだけど、血涙を流し、とある台詞を叫びながら大量の札でこれらを召喚した。

ちなみに台詞は――

『うおおおお！　行けっ、俺たちの全財産！』

――だった。

あいつら自身の力でこれだけの数を用意するのは不可能と疑問に思っていたので、納得と共にその運の悪さに笑った。

「あー、あいつら運が無いね本当」

「あの気迫に免じて通してやりたい気もするが、そういう訳にも行かんからな」

じゃ、殲滅戦と行きますか。

――side　エヴァ――

いろいろな意味で背水の陣を敷いてきた侵入者たちだが、本当に運が無いと思う。

普段の封印されて脆弱な私ならともかく、満月の日の私を相手にするのだから。

ついでに慧がいるが、その力量は未知数。

奴の話が本当なら、神すら敵でないのだろうが――

「今回は魔術だけで相手して上げる・・・・・『――――』」

――理解できない一言で、辺り一帯を何かが囲んだ。

それはおそらく結界、この世界の魔法とは違うせいか、存在を理解できず感知しにくい。

いつの間にか大ぶりな杖を取りだした慧が、魑魅魍魎どもの居る一画を指し示す。

「これで周りは気にしなくていいね『――――』」

また理解できない一言で、杖で示された場所にいた魑魅魍魎共が潰された。

重力魔法とかそんなありきたりなものではない・・・・・おそ

らくは空間そのものに圧縮されていた。

「エヴァは手を出さないの？　『――――』」

嫌な風が吹き抜け、さらに魑魅魍魎が塵となる。

今度の風は、存在そのものを蝕んでいた。

「お前の魔術はえげつないな」

「魔術っていうのは意味や概念、つまりはその神秘性に重きを置いているからね・・・・・・最も、僕の使うのは本来のそれから変質しているけど」

なるほど、だからあんなにえげつないのか。

こちらの魔法は即物的で肉体を対象とするのが主で、慧の魔術は精神や魂を対象とするのが主であるようだ。

もしかしたら、私すら容易く死に至らせることが出来るかもしれない・・・・・・何かが甘く香った気がする。

それは禁断の果実の様に私を誘う。

「エヴァ・・・・・・それを望むなら僕は君を軽蔑するよ？　『――――』」

慧の声でその香りは消え、私の意地を言葉にして吐き出す。

「見くびるなよ慧。私は『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法

使い』と呼ばれ・・・・・・永遠を生きてきたお前が惚れた女――エヴァンジェリン＝Ａ＝Ｋ＝マクダウェルだ！」

それを望んだことは数え切れないほどあるが、安易にそうなろうというほど落ちぶれてはいない。

ついでに・・・・・・この老成しただけのガキを放っては置けないしな。

「うん、さすがは僕の惚れた女だよ『――――』」

「う・・・・・お前が惚れただけで、私はお前に惚れた訳でないからな、勘違いするなよ？」

なんでこいつは、こうも感情をストレートに伝えてくるんだ！

つい、恥ずかしさから目線を逸らしてしまう。

そして、丁度忘れていた敵たちの方へと向くと、残っていたのは失禁しながら失神した侵入者たちが倒れているだけだった。

――ｓｉｄｅ　ｏｕｔ――

エヴァに僕の実力を見せるため、使う能力を限定した上で手加減することにする。

「今回は魔術だけで相手して上げる・・・・・・『――――』」

まず、のぞき見と逃走防止のために、高速神言を呟いて結界を張った。

エヴァが不思議そうに周囲を見回した後、腕を組んで考え始める。

まあ、ただ見ただけでは良く分からないだろうけどね。

メディアのロッドを取り出して、次の対象をエヴァに指し示す。

「これで周りは気にしなくていいね『――――』」

十二分に手加減した『圧縮』を発動し、敵の一画を潰す。

エヴァの表情が険しくなる・・・・・空間そのもので潰した事を察したようだ。

さすがはエヴァ、魔術としては理解できなくても、現象としては理解している。

「エヴァは手を出さないの？　『――――』」

僕もこっちの魔法を見て見たいのでエヴァに聞いたが、僕の魔術を観察することで忙しいようで返事が無い。

言葉が出たのは、『病風』が敵を塵にしたのを見届けてからだった。

「お前の魔術はえげつないな」

こんな超一級の霊地に、麻帆良学園を存在させている連中が使う魔法と比べればそうだろうなと納得する。

「魔術っていうのは意味や概念、つまりはその神秘性に重きを置いているからね・・・・・・最も、僕の使うのは本来のそれから変質しているけど」

変質していると言ったが、これらの魔術は本来、体の魔術回路を世界の魔術基盤に接続して使うものだ。

だけど、この世界に元の世界の魔術基盤はない・・・・・・なら何故魔術を発動出来るかとなる。

根源の魂、世界内で存在する魂でなく、世界の外から世界に影響を与える魂がその基盤となっている・・・・・・似ている例は固有結界とその派生だ。

しかも、外から持ち込んだ能力は、世界よりも上位に値している位置から行使される・・・・・・つまり、行使している間は僕から法則の押し付けが起こる。

例えば、同じ程度の威力の魔術とこの世界の魔法をぶつけた場合、神秘の格という法則の押し付けで、神秘という基準が無い魔法に魔術が勝ってしまう。

もっとも、込める魔力の大小の差で神秘を押し切ることもできるが。

なお、これは前の世界で実証済みである。

一瞬、エヴァへの説明を思考するが、エヴァから匂った死の香りからエヴァの思考を読み取って、それから引き戻す言葉を紡ぐ。

「エヴァ・・・・・・それを望むなら僕は君を軽蔑するよ？　『――――』」

僕の言葉でエヴァから死の香りは消え、エヴァが不敵に宣言する。

ついでに邪魔をしようとする奴らを『冥火』で音をたてないように一瞬で全て焼き払っておく。

「見くびるなよ慧。私は『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』と呼ばれ・・・・・・永遠を生きてきたお前が惚れた女――エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウェルだ！」

僕を励ました時のように、格好よく宣言するエヴァ。

「うん、さすがは僕の惚れた女だよ『――――』」

エヴァを褒め、片手間に術者たちの精神を攻撃して気絶させる。

「う・・・・・・お前が惚れただけで、私はお前に惚れた訳でないからな、勘違いするなよ？」

僕の言葉に可愛らしく目をそむけるエヴァ。

あ・・・・・・そっち向いたら――

「いつの間に・・・・・・少し考え込みすぎていたか」

あー、せっかく可愛かったのに・・・・・・まあ、きりっとした表情も可愛いのだけど。

龍牙兵を精製し、八つ当たりとしてきつく拘束させる。

それを見届けたエヴァが、僕に話しかけてくる。

「今回の戦いではお前の強さが良く分からなかった・・・・・・だから、今度私の家に来い」

おおー、家にお呼ばれされました・・・・・・目的が違うと分かっていても嬉しい。

が、それは早とちりだったようで――

「そのだな・・・・・・手伝ってくれた礼に手料理を振るってやる・・・・・・あくまで、礼としてだからな！」

――可愛らしく手を振りながら、こんな事を言ってくれました。

「よっしゃー！」

「きゃっ！？」

若干キャラを崩壊させながら、僕は天に吠えたのだった。

――第二章　放課後デート、夜のデート――（後書き）

戦闘については最強であることと、超理論を説明しただけなので、あまり気にしないでください。
最後はうまいまとめ方が浮かばずぐだってしまった・・・・・・無念。
詰め込み過ぎて事後処理とか省いていますが、エヴァとの絡みがメインなんで気にしないことにしてくださるとうれしいなとか思ったり・・・・・・（チラッ

――設定＋おまけ――（前書き）

いろいろ詰め込み過ぎて、一番の容量になってしまったし。
とりあえず最強。
使われない設定もあるかもだけど、気にしないでください。
最後のおまけは、第一章の後の話。

――設定＋おまけ――

――主人公――

名前――白沢（しらさわ） 慧（けい）

容姿――黒目黒髪の慧音、後ろ髪を白い髪紐で首筋に束ねている。

制服以外の服装は、大抵黒で統一している・・・・・・東方世界の時の名残で、それ以外の色だと理由が無ければ落ちつかない気がするらしい。

能力――永遠の時で全ての魂情報を統合したため、全能力が加算された状態。

つまり、何の強化がなくても、英霊数体分の身体能力や運気を持っている。

魔力に関しては異常の一言、永遠を過ごす間で、世界を操作できるだけの力まで成長している。

他にも、幾つかのスキルが能力を上げていたり、宝具が詩音と共に永遠を経過したことで異常な神秘を有している。

この魂自体の能力――『歴史を食べる（隠す）程度の能力』

所持能力――『陰陽五行を操る程度の能力』

『時空間を操る程度の能力』

『魂を複写する程度の能力』
『老いる事も死ぬ事も無い程度の能力』
『炎を司る程度の能力』
『永遠と須臾を操る程度の能力』
『境界を操る程度の能力』
『あらゆる薬を作る程度の能力』
『第五次聖杯戦争における真アサシン以外の発展能力』
『第三魔法――魂の物質化』
『歴史を食べる程度の能力』

――主人公の前世たち――
名前――十夜（とうや）　詩音（しおん）
居た世界――東方世界、つまり幻想郷。
この魂自体の能力――『五行を操る程度の能力』

慧から見た位置――前世

名前――詩音

居た世界――東方世界（世界内での転生で「十夜　詩音」になった）

この魂自体の能力――『五行を操る程度の能力』（十夜　詩音とは同じ魂）

慧から見た位置――前前世

名前――アインスフィール＝フォン＝アインツベルン

居た世界――Ｆａｔｅ世界

この魂自体の能力――『魂を複写する程度の能力』

慧から見た位置――前前前世

名前――不明（人格の原型）

居た世界――不明（強いて言うなら現実世界）

この魂自体の能力――『時間を操る程度の能力』

慧から見た位置――前前前前世

――能力――

『陰陽五行を操る程度の能力』

――陰陽五行、すなわち世界を構成する五つの元素と、それらに分化する前の陰陽という要素を操る能力。

これらを操ると言うことは、世界を操ると言うこととほぼ同義。

物質的要素なら大抵どうにでもなり、それ以外の要素も限定的ながら操れる。

元は『五行を操る程度の能力』だったが、永遠の間にこの能力へ昇華した。

――能力元人物「詩音」

『時空間を操る程度の能力』

――時間の歩みを操り、空間を意のままにする能力。

時間の逆行は出来ないが、寿命だけ止めたりと十二分に反則。

空間を切り張りしたり、空間の断層を生みだしたりと反則。

元は『時間を操る程度の能力』だったが、永遠の間にこの能力へ昇華した。

――能力元人物「名前未登場、慧の人格の原型」

『魂を複写する程度の能力』

――ここでの魂は、世界内の魂でなく世界外の魂を指す。

世界外、つまりは世界より上位である情報をコピーするため、世界に対して絶対の影響を与える。

慧の転生の大本で、直接触れた魂から情報を受け取り、『　』に戻る際に新たに出てきた魂に情報を受け渡している。

『　』に戻っていた人格の原型が、新たに出てきたアインスフィールの魂にこの能力で情報を拾われた。

――能力元人物「アインスフィール＝フォン＝アインツベルン」

『老いることも死ぬこともない能力』

――東方世界で『十夜　詩音』だった時に飲んだ『蓬莱の薬』によってもたらされた能力。

一度世界と共に終わったことで魂の記録になったため、任意での不老不死化が出来る。

――能力元人物「十夜　詩音」

『炎を司る程度の能力』

――火や炎というものを司る能力。

純粋な火の元素だけで体を構成したり、あらゆる炎を自分の意思の下に置ける。

元は東方世界で妻であった妹紅が『五行（主に火を）操る程度の能力』を永遠の間に昇華させた能力。

世界終焉の際に詩音と共に居たために、詩音の魂がその情報を取り込んだ為に入手した。

――能力元人物「十夜（旧姓　藤原）　妹紅」

『永遠と須臾を操る程度の能力』

――永遠、つまり変化しないものの概念で不変のもの。

さらに、永遠であることというとは、無限であるということ。

須臾とは時間の最小単位で、生き物の認識できないわずかな時のこと。

これが限りなく組み合わさることで、時間は連続のように見える。

須臾で組まれた物には余計な者が無くなり、最強の強度を誇

る。

元の持ち主は東方世界で妻であった輝夜だが、世界終焉の際に詩音と共に居たため、その魂情報を詩音が取り込んだ為に入手した。

――能力元人物「十夜（旧姓　蓬莱山）　輝夜」

『境界を操る程度の能力』

――ありとあらゆるものの境界を操作する能力。

驚くべき万能性を持つ能力。

主にスキマと呼ばれる空間を開いたり、結界を作る時に使う。

東方世界の幻想郷管理者である紫が、死に際に詩音へと譲渡した。

表向きは幻想郷管理者としての判断だが、私情もあっただろうことは否定しない。

この譲渡は、境界を操る能力を持っていた紫だからできたことである。

――能力元人物「八雲　紫」

『あらゆる薬を作る程度の能力』

――材料さえあれば、あらゆる薬を作れる能力。

元は東方世界で従者であった永琳の能力。

一の知識から十の発展を容易く生み出す、月の賢者たる永琳の天才性を揶揄した能力である。

実際は名前通りの性能は無いが、その能力を発動しながらならば、慧は別世界でも元の世界同じように薬を作ることが出来る。

さらに、その世界で知識を手に入れれば、そこからその世界原産の薬も作れる。

世界終焉の際に詩音と共にいたため、永琳の魂を詩音が取り込み入手した能力。

――能力元人物「八意　永琳」

『第五次聖杯戦争における真アサシン以外の発展能力』

――イリヤを守るため、アインが代わりに聖杯となったことで英霊の魂に触れて入手した能力だった。

永遠の間に幾つかの能力も発展を遂げている。

なお、なぜかクラススキルも行使可能。

――能力元人物「アルトリア」「クー＝フーリン」「エミヤ」「メドゥーサ」「ヘラクレス」「佐々木　小次郎」「メディア」「ギルガメッシュ」

『第三魔法――魂の物質化』

――魂自体を生き物とし、精神体でありながら物質に干渉する高次元の存在を造り出す魔法。

派生として、魂の情報を肉体に影響させて傷をいやしたりなどすることも可能。

アインの時に聖杯として第三魔法を行使し、Ｆａｔｅ世界の『　』に繋がって手に入れた能力。

――能力元人物「アインスフィール＝フォン＝アインツベルン」

『歴史を食べる程度の能力』

――起こった事象を無かった事と認識させる能力。

物証は消えないが、慧が隠している限りそれを認識することすらかなわない。

ただ、それによる認識の歪みを抑えきれないと、効果が消える。

慧音と同じ名前の能力だが、能力としては一段上。

――能力元人物「白沢　慧」

――スキル――

『対魔力：ＥＸ』

――余程の規格外でない限り、任意であらゆる魔力という概念が関わる物を無効化する。

『騎乗：Ａ＋＋』

――幻獣や神獣に竜種、果ては戦闘機などのあらゆる乗り物を乗りこなせる。

『単独行動：Ａ＋』

――単身では意味が無いスキルだが、分身体などが本体不在でも半永久的に行動できる。

『陣地形成：Ａ＋』

――魔術師としてだけでなく、戦士としても自身に有利な陣地を創り上げる。

神殿、城塞をも構築可能。

『道具作成：Ａ＋』

――魔術具、魔法具を作成できる。

異界の魔法具であろうと、知識を得れば製作できる。

『気配遮断：Ｂ』

――気配を断ち、相手に発見されにくくなる。

自然とランクが上がっただけなので、完全な気配遮断は出来ない。

最も、警戒していない一流の後ろに立つことぐらいは可能。

『狂化：D』

――詩音の時に大幅にランクダウンしたスキル。

理性や知性を重んじていたためランクEまで落ちていたが、慧になって絶望していた間に少し上がった。

理性をある程度奪われるが、ある程度パラメーターを上げる。

『直感：A』

――戦闘時、常に自身にとって最適な展開を感じ取る能力で、その第六感はもはや未来予知に近い。

視覚、聴覚への妨害を半減させる。

『魔力放出：A＋』

――武器ないし自身の体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出することで能力を向上させる。

本来ならしっかりとした術式を用意した方が効率は良いのだ

が、それ無しで効率的に運用できるため、縛りの無いこちらの方が性能が高い。

『カリスマ：D（A＋）』

――本来なら大軍団を指揮、統率する能力であるが、慧がそれを発揮する気が無いので相当ランクが落ちている。

過ぎたカリスマは魔力、呪いの類といってもいい。

『戦闘続行：A＋』

――致命傷を負っても戦闘を可能とする能力。

英霊複数人分の身体能力のせいで、一つ程度の致命傷では死にきれない。

肉体をバラバラにしなければ死なないだろう・・・・・・最も、不老不死の能力を持っているが。

『仕切り直し：C』

――不利になった戦闘を開始前の状態に戻す。

『ルーン：B』

――魔術刻印ルーンの所持。

『矢よけの加護：A』

――飛び道具に対する防御、狙撃手を近くしている限り、どのような投擲武装だろうと肉眼でとらえて対処可能。

生半可な狙撃手では、対処する必要もなく当たらなくなる。

超遠距離からの近接攻撃や広範囲の全体攻撃は判定外。

『神性：ＥＸ』

――神霊的性を持つかどうかだが、元々の適性が高く最期には神と信仰されたためのランクＥＸ。

『千里眼：Ｂ』

――視力の良さ、つまり動体視力と遠方の補足力の高さ。

ついでに透視も備えている。

『魔術：Ａ＋』

――大抵の魔術は適性が少なくとも行使できる。

『心眼（真）：Ａ』

――修業や鍛錬で培った洞察力で彼我の戦力を冷静に把握し、活路を見出す『戦闘論理』である。

さらなる研鑽の下に、弱者としての論理、強者としての論理を持つ。

勝率が１％でも残っているならそれを引き寄せたり、相手の勝率を限りなく０に近づけることもできる。

『魔眼：Ａ＋＋』

――最高レベルの魔眼『キュベレイ』を所持。

持てる魔力でのブーストの結果、余程魔力（魔力ランクＡ）を持つ者未満は石化する。

耐えても、全能力を二ランクは下げる重圧もかかる。

『怪力：Ａ』

――ランク相当の時間、筋力をワンランク上げる。

『高速神言：Ａ』

――呪文、魔術回路との接続無しに魔術を発動可能。

大魔術であろうと、一工程で起動させられる。

神代の言葉なので、現代人には発音できない。

『金羊の皮：ＥＸ』

――竜を召喚できるとされるが、慧は召喚する竜を持っていないため使用不可能。

とっても高価。

『燕返し・射殺す百頭』

――対人魔剣・最大補足９人。

相手を三つの円で同時に断ち切る絶技を、ほぼ一瞬に九連続で繰り出す。

多重次元屈折現象が起こっているのは一撃づつで、連撃自体は同時ではない。

『心眼（偽）：Ａ』

――第六感、虫の知らせといった、天性の才能による危険予知。

直感とは微妙に違うため、お互いに感じ取れない部分を補い合っている。

視覚妨害への耐性あり。

『透化：Ｂ＋』

――明鏡止水、武芸者の無想の域としての気配遮断。

精神面への干渉を無効化する精神防御あり。

『宗和の心得：Ｂ』

――同じ相手に同じ技を使用しても見切られなくなる、特殊な技能。

『勇猛：Ａ＋』

――威圧、混乱、幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

格闘ダメージを向上させる。

『無窮の武練』

――いついかなる状況においても体得した武の技術は劣化しない。

永遠の間鍛錬を続けてきた故の結晶。

『投擲：Ａ』

――大抵の物を弾丸として放つ技能。

英霊から得たスキルではなく、弾幕戦で多用することで得たスキル。

『鉄甲作用：Ａ』

――当たると相手をすっとばす投擲技法。

さらにアレンジを加えて、威力を逃がさず伝える事が出来る。

元は黒鍵の憑依経験から習得。

『符術：Ａ』

――和製術式を使用した札を所持。

『武術：A』

――美鈴や天魔に教わった体術の腕前。

時折、いろいろと超越した技がある・・・・・・天魔（外見中身、東方不敗）のせい。

武器戦闘や魔術戦闘を好むため、あまり使用されることはない。

というか、自重している。

『黄金律：A』

――人生でどれだけ金が回っていくかの宿命。

大富豪規模で一生金には困らない金ピカぶり。

『家事：A』

――家事の上手さ、現代日本の価値基準なら姑も文句は言えない腕前。

『調理：A』

――料理の上手さ、限られた食材からでも一級の料理を作り出せる。

『演奏：Ｂ』

――そんなに才能が無かったが、鋭敏な感覚を頼りに練習することで、まあまあのプロ並み。

才能、つまりセンスが無いため作詞作曲は無理。

――道具――

『幻想郷の皆の愛用品』

――皆の遺品、思い出の品。

『ＫＡＰＰＡの発明品』

――ステルス迷彩などの品から、段ボール箱まで。

全てに共通しているのは、耐水性能の異様な高さ。

海に放置しても壊れないとか・・・・・・。

『幻想郷縁起』

――全巻を所持、時折読んで幻想郷を懐かしむ。

――おまけ　第一章の後――

「よっと」

「うん・・・・・・」

連れてきたエヴァを僕のベッドに寝かせ、布団をかけてあげる。

「すぅ・・・・・・すぅ・・・・・・」

エヴァンジェリンの寝顔が可愛すぎる。

「ん・・・・・・ぅぁ・・・・・・」

つい、ツンと柔らかそうな頬を突いてしまった・・・・・・すごくプニプニしてました。

「ぅー・・・・・・」

な、に、こ、の、か、わ、い、い、い、き、も、の。

平常心・・・・・・平常心だ僕！

良い感じに恋心と父性が刺激されて、テンションが異様に上がってくる。

「料理、そうだ、料理をしよう」

このままだと越えてはいけない一線を越えそうだったので、しばらくエヴァンジェリンから離れることにした。

夕飯時でもあるから丁度いい。

台所に入った僕は、料理の鉄人となる。

平常心で料理を作りつつも、愛情をしっかりと込めて行く。

「ん・・・・・・ご飯？」

「・・・・・・ぐあ！」

寝ぼけ眼でフワフワと歩いてきたエヴァンジェリンに、心臓を撃ち抜かれた。

片手で枕を引きずっているのも、かなりくる物がある。

ちゃんと、料理から顔を背けて叫べた僕を褒め称えたい。

「・・・・・・ん・・・・・・ん・・・・・・ん」

突っ立ったまま頭が揺れ出したので、すぐに火などを止めて手を洗い料理を止める。

「ほらエヴァンジェリン、こっちおいで」

「・・・・・・んー」

枕を握って無い方の手を掴み、ゆっくりと先導する。

なんとかハプニング無く、エヴァンジェリンをベッドに戻すこと

に成功した。

調理に戻り、しばらく経って――

「・・・・・・って、どこだここは！？」

――エヴァが完全に覚醒したようだ。

軽い足音と共に、エヴァンジェリンが台所にやって来る。

「って、貴様か慧！」

「エヴァンジェリンが気絶しちゃったから、家に連れてきたんだ。あ、もう少しで夕飯出来るから」

最後の味見をし、火を止めて盛り付けに入る。

「う・・・・・・そ、そうか」

毒気を抜かれたエヴァンジェリンが、黙ってしまった。

そのまま僕の作業を見ていたが、すこし悩んだあと話しかけてくる。

「あー、何か手伝ってやろう・・・・・・」

「んー、これ運んでくれる？」

目線を横に逸らしながら、頬を染めて言うのは反則だと思います。

未だ料理の過程である事＋覚悟が出来ていた事、この二つのおかげで致命的な事にはならなくて良かった。

この後、夕飯を食べて貰ったが、心底悔しそうに美味いと言ってもらえて良かった。

送っている最中、いろいろと文句を言われたけど、恥ずかしがっているだけだったので微笑んでいたら蹴られました。

出会って初日にしては、良い関係を築けたかなと思う。

――設定＋おまけ――（後書き）

おまけの最後はすいません。
もっと書けた気もするけど、設定、しかもオマケだったので強引に済ませてしまいました。
もっとエヴァを可愛く書けたかなぁ・・・・・・。

――第三章　再告白――（前書き）

流れが良く分からなくなってきた・・・・・なんかいろいろ突発的？

――第三章　再告白――

Ｐｉタンッ！

午前６時００分起床。

「ついに、この日がやってきた・・・・・・」

普段なら、最高でも１０時以降にしか起きれない僕が、こんなに早く起きたうえに覚醒が速いのには訳がある。

三日ほど前、エヴァと夜のデート（麻帆良警備）を終えたときのエヴァの一言――

「そのだな・・・・・・手伝ってくれた礼に手料理を振るってやる・・・・・・あくまで、礼としてだからな！」

――この一言で、休日の朝なのに僕が真人間のようになったのだ。

あの後、互いの・・・・・・というかエヴァの都合を合わせて（僕は予定なし、あってもキャンセル）、休日である今日に招待される事となった。

その日から新しい服（黒）と少しの花を（あまり世話に手間取らせないように）用意し、万全の態勢で今日を迎えた。

午前７時０３分、支度を終えた僕は寮を出て歩き出す。

「さて・・・・・・あと４時間どうしようか」

エヴァに来いと言われた時間は午前１１時、興奮のあまり早くに起きるようにしてしまったので、時間がありあまっている。

ここからエヴァの家までは３０分もかからないので、ゆっくり歩いても一時間すら消費できないだろう。

「早々に行くか？　いや、エヴァにも準備ってものがあるだろうし・・・・・・」

ああ・・・・・・兎居ないかな兎。

前世では、妻とか従者とかが居ないときは、兎を抱いてのほほんとしていたものである。

「居るわけ無いか・・・・・・じゃあ、ネコ居ないかなネコ」

藍と一緒に橙を可愛がったり、橙（ようやく八雲姓がもらえたころの）が統べていたネコ達と遊んだものである。

「にゃー」

「おお・・・・・・ちょうどいたし」

服や体を汚れないように保護してから、ネコの元へ歩いて行く。

目を輝かせてネコに近寄ると、ネコも僕の方にやってくる。

動物にやたらと好かれる体質（おそらくは騎乗スキルとかも関係ある）に感謝である。

それから二時間と少しほど、ネコ達（途中からかなり増えた）の相手をし、餌を取りに行く猫たちを見送った。

午前9時２４分、タカミチが男子寮から出てくる。

「やあ、奇遇だね慧」

「あータカミチか。なんて言うか・・・・・・しばらくここにいたから奇遇ってほどではないはず」

大体、１０時半ぐらいまで男子寮前に居座っていただろうから、出かけるならかなりの確率で会っていただろう。

なお、他の男子生徒には会っていない・・・・・・休日の男子が昼前に起きるとか珍しいと思う、部活なら僕より早く出てるだろうしね。

「具体的にいえば午前7時からここにいた」

「・・・・・・そ、そうなんだ」

タカミチは急ぐような用事もないようで、僕の予定時間まで友人として適当な話が出来た。

午前１０時２３分、時計を確認した僕はタカミチにもう行くと告げる。

「あ、タカミチもこっちの方に用があるんだ？」

「うん、そうみたいだね。どうせだから、途中まで話しながら行

こうか？」

一人でのんびり歩くのもいいけど、久しぶりに友人と話しながら歩くと言うのもいいものだね。

会話が弾みに弾み、お互い大笑いである。

「いやー、それにしても結構歩いたのに、まだまだ別れないなんてね」

「そうだね。どうも、お互い目的地が近いようで、暇潰しには丁度いいや」

あっはっはっは――そう笑っていたのはエヴァの家がある森林に入るまででした。

お互いに口を閉ざして顔を引き攣らせている・・・・・この森林を通って行く目的地が一つしか浮かばないからだ。

「・・・・・あー、タカミチってエヴァの知り合い？」

「一応数年前からの知り合いだよ、まさか慧もエヴァと知り合いだったなんて・・・・・」

そう言って考え始めるタカミチ。

僕は一般人として通っているので、エヴァとの関連を考えているのだろう。

そんなタカミチを置いて、エヴァの家の呼び鈴を鳴らす。

「丁度来たか・・・・・・って、タカミチまでいるのか」

「ちょっと考え込んでるみたいだから、二人で話そう？」

タカミチが来たため、僕らの関係のカバーを考える必要がある。

静かに扉を閉め、エヴァの後ろを歩いてソファーに座る。

「そうだな・・・・・・精神や記憶への干渉を妨害出来るか？」

「出来るけど、こっちの魔法に効果があるか、試さないと分からないよ？」

おそらくは、精神干渉計の魔法が効かない体質の一般人だということにしたいのだろう。

魔法でなく魔術での妨害なら、妨害と気取られないと判断したか。

「『――』記憶系をあらゆる要因から保護したけど、今日一日の記憶で試してみてくれる？」

「ずいぶんあっさりと言うな、お前は」

まあ、記憶に干渉されるのは怖いし嫌だけど。

「僕の技量へのの自負もあるけど、エヴァなら悪くしないと信じてるから」

「そ、そうか・・・・・・と、当然の事だな」

照れてる照れてる。

信頼されることに慣れていないからか、こう言う事を心から言うと、すぐ可愛い顔を見せてくれて役得である。

「ゴホン。では・・・・・・いくぞ」

「いいよ、来て」

「終わったが、気分はどうだ？」

「ん、全然大丈夫。記憶も連続してるし、抜け落ちてる事項も無いよ」

力が浸食してくる不快感はあったけど、問題無く魔術で遮断出来た。

「なら良い。私の方も良く分からない内にに無効化されたな」

と、そこでバタンと大きな音を立ててタカミチが入ってきた。

「エヴァ！　今の魔力は！？」

「ちょっとした実験だな。で、結果として、慧に魔法を教えるこ

とにした」

は・・・・・・と、タカミチが固まる。

さっきもかなり考え込んでいたりと、頭の回転速度は並みのようだ。

「慧に記憶消去を試して、無効化された・・・・・・これで分かるだろう？」

「・・・・・・なんとかね。でも、魔法を教えると言うのは早計じゃ？」

うん、回転速度は並みでも、出来自体は悪くないみたいだ。

そんな事を思いながら、口を出す。

「ああ、それは僕が頼んだ事だから。好きな子と隣り合いたいっていうのは・・・・・・タカミチには分かりそうにないね」

「・・・・・・あー、エヴァ？」

「なんだその目はタカミチ！　私はまだあのバ・・・・・・いや、何でもない」

あーあ、恋敵はかなり手ごわいようで。

まあ、それくらいでないと張り合いがいもないし、そういう部分で疎いエヴァもそうそう僕に惚れたりはしないだろう。

それに、今隣にいるのは僕だ。

これからじっくり年月をかけて、エヴァを僕に惚れさせて行けばいいさ。

おっと、タカミチが真剣な顔をしているな。

「・・・・・・慧、こっちの世界は生半可な覚悟で来ると後悔するよ？」

「ただの生きた死人だった僕を引き上げてくれたのはエヴァだ。なら、その命を彼女の為に使うのに何をためらう必要があるんだ？」

タカミチの真剣な言葉に、カバーする必要もない魂からの思いを告げた。

僕は、真実今回の命はエヴァの好きにしてもらっていいと思っている。

慧音に良く似た体なので、あまり粗末には扱ってほしくないが。

「・・・・・・・・なら、僕からは言うことはないよ。エヴァ、別荘を借りるよ・・・・・・・・エヴァ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・っは！？　な、なんだタカミチ！？」

うん、少しはこっちに傾いてくれたかな？

別に狙った訳ではないけど、少しくらい胸に来てたら嬉しい。

「別荘借りるよ？」

「あ、ああ、好きにしろ！」

まだ頬の赤いエヴァに、タカミチは面白いものを見たように笑いながら部屋を出た。

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

僕から目をそむけて俯くエヴァ。

実を言うと、そのいつもと違うしおらしい姿に僕の胸も年甲斐なく弾んでいる。

「・・・・・・」

「そ、そうだ・・・・・・お、お前に料理を振舞ってやるんだったな。あ、後は仕上げるだけだから、す、少し待っていろ」

逃げられた・・・・・・が、助かった。

正直、あんなに緊張したのは久しぶりで、自分が恋愛初心者だと改めて思い知らされた。

いつもは思いのままエヴァに触れているが、今は直視することすらままなりそうにない。

前は結婚していた僕だけど、愛すれど恋は知らずって感じである。

「はぁ・・・・・・これはやばい」

エヴァの家は周囲には森しかないため、家の中にいればほとんど音が無くなる。

で、聞こえるのはエヴァの調理の音ばかり・・・・・・エヴァの料理の様子がありありと浮かぶ。

うん・・・・・・良いね、良いな、良いよ。

エヴァのエプロン姿を妄想しながら、緊張をほぐす。

さっきとは違った感じで心臓が跳ねるが、これならなんとかなる。

調理の音が止み、エヴァがトレイに料理を載せて持ってくる。

とん、とん、と食事が並べられ、二人向き合って食卓に座る。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

やばい、また緊張してきた。

「い、いただきます」

「め、めしあがれ」

エヴァも僕もいろいろとおかしくなってる。

エヴァが用意してくれたのは、釜で炊いただろうご飯と、味噌汁、焼き魚、お浸し、冷や奴と、シンプルでオードソックスな和食である。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

黙々と食事を続けるのだが・・・・・・緊張のあまり、味が分からない。

「ご、ごちそうさま」

「お、おそまつさまでした」

もったいない事に、味も分からぬまま食事を終えてしまった。

「あらいものしてくる」

「うんわかった」

沸騰している頭を冷ますため、二人して互いから離れる。

なんというか、遥か年齢上の僕がこんなんでどうするんだまったく。

バシンと頬を叩き、気合いを入れる。

もう一度気持ちを伝えよう、最初みたいに勢い任せな宣言でなく、

僕の心を伝えるそれを。

洗い物を終えたエヴァが、そろそろと戻ってきてソファーに座る。

よし言え、すぐに言え、絶対に言え。

「エヴァ・・・・・・さっき言った通り、今の僕は君の為にいる」

「・・・・・・」

さらに赤くなって縮こまるエヴァを見ながら、少しずつ思いを告げる。

「君は絶望していた僕を救ってくれた・・・・・・それは感謝しているし、この命を投げ出しても君を助ける事に悔いはない」

「・・・・・・？」

顔を赤くしたままながら、僕の言葉に怪訝な顔をするエヴァ。

絶望から救ってくれたのには感謝するが、それは惚れる要因のほんの一部でしかない。

「僕は・・・・・・そんな僕の悩みを笑い飛ばそうとする、君のあり方に惚れたんだ」

「・・・・・・そうか、ありがとう。だが、今の私はお前に応える想いが無いんだ、すまない」

告白し振られる、その行為でお互いの憑き物が簡単に取れた。

無駄な緊張は取れ、自然体に戻る。

「ふぅ・・・・・・疲れた」

「まったく・・・・・・本当に面倒な感情だったぞ」

本当に疲れた・・・・・・あんなのに耐えられるのは若者だけだって。

僕は体は若者だけど、精神年齢測定不能だから爺だよ。

「ま、そういうことなんで、今まで通りアタックさせて貰うんで」

「好きにしろ、私も悪い気はしないからな・・・・・・・あ」

スキマを開いて、自宅のベットに直行・・・・・・布団に頭を突っ込んで悶える。

油断したところを一突きとは、エヴァ・・・・・・なんて恐ろしい子。

――第三章　再告白――（後書き）

いろいろと切り替えが早い気がしますが、砂糖を袋ごと投入。
タカミチ？　タカミチはただの引き立て役です。
後半作った後には、前半の魔法生徒化は頭から吹っ飛んでました。
プロット無いから、これからの展開も分かりません。
というか、原作は魔法世界編の後も続くのだろうか？
主人公以外はできるだけ原作準拠にしたいので、過去の事件とかは早めにできってほしいですね。

――第四章　「今のは『燃える天空』じゃない……『火よ灯れ』なんだ……o

久々にネギま流魂記更新です。
相変わらずチートな詩音ですが、潤滑に話を進めるためのものと思ってください（力技で解決するかも宣言？）。
話しの流れがスムーズじゃない気がしますが、スランプのせいですので、軽く流していただけると幸いです。

――第四章　「今のは『燃える天空』じゃない……『火よ灯れ』なんだ……o

「まったく、いきなり帰る馬鹿がいるか！」

「あー・・・・・・その、まぁ、とりあえずごめん」

蒸し返してまた同じ状態に戻るのもあれなので、素直に謝る。

あの後結局、少しクールダウンしてからスキマで戻ってきて、エヴァに叱られている。

「まあいい。こんなくだらない事で時間を無駄にするのももったいないから、ここで許してやる」

鼻を鳴らして、仕方なくという感じで言い放つエヴァ。

でも、エヴァの言葉を吟味すると、僕との時間を無駄にしたくないとも聞こえる・・・・・まあ、僕の願望なんだけど。

「でだ、今日はお前の力を見せて貰おうかと思ったのだが、タカミチがいるからそれは出来ない。そういうわけで、この世界の魔法をお前に教えてやる」

「ありがとうエヴァ」

さて、この世界の魔法はどんなものなのかな？

このあいだの夜の警備は、僕が片付けたからエヴァの魔法は見れ

なかったしね。

「ついて来い、私の別荘に連れて行ってやる」

「別荘？」

僕の疑問には答えず、すたすたとエヴァは歩いて行く。

地下に向かっているので、どこかに転移でもするのかと思っていると、地下にはボトルシップならぬボトルキャッスルとでも言うべきものが鎮座している。

それを囲むように、幾つかの極地が再現されたボトルが配置されている。

「これ、結構凄いね・・・・・・かなり空間と時間を圧縮してる」

「よく分かったな。これはダイオラマ魔法球という魔法具で、外での一時間が中では二十四時間、つまり一日となる優れものだ」

エヴァはそう言うと、魔法具に近寄ることで現れた陣によって転移する。

僕もすぐ後に続いて転移させられ、目に映るのは蒼く広い空と雄大な自然と海、そして白亜の城だ。

「ようこそ私の別荘へ。歓迎するぞ詩音」

「良い城だね。さすがエヴァ、趣味がいい」

記憶にある西洋建築は紅魔館だけ・・・・・・あの真っ赤に染まった館は、さすがに趣味がいいとは言えなかった。

とりあえず思うのは、高所恐怖症にはこの入り口部分は恐ろしいだろうなと言う事だけだ。

５００ｍほど先に城が見えるのだが、入口の魔法陣があるところは周りに何もない円柱で、そこから城まで手すりなしの橋が続いている。

「なんでこんなとこに入口？」

「まあ、様式美という奴だな。さすがに面倒だから、城に転移する陣は用意されているが」

ふーん、そう言うものなのか。

心で頷きながら、エヴァの後に続いて転移する。

城を進み、さらに何回か転移することで、入口の柱を見上げる広場に着く。

「少し待っていろ、道具を準備してくる」

「ん、待ってる」

また転移したエヴァを見送り、一人で手持無沙汰に座っている。

近くに滝があるので湿気が凄いのだが、周囲が適温の為心地よいものとなっている。

「あーこれはやばい、気持ちよすぎて眠くなる……ということで膝枕を所望してみる」

「アホか。下らない事言ってないで、さっさとやるぞ」

手に幾つかの道具を抱えてきたエヴァが、そのうちの一つを僕に手渡してくる。

木目がいい味を出したシンプルな杖だ。

「魔法初心者が使う杖だ。とりあえず、それで練習するぞ」

「へぇ……結構いい杖だね」

結構な年月を積み重ねてきているのに、劣化しないようにしっかりと手入れされている。

「だろう？」

僕の言葉に嬉しそうに答えるけど、どこか郷愁を感じる。

今は深く突っ込まず、エヴァの説明を待つ。

「お前の魔術はどうだか知らんが、この世界の魔法は、精霊に魔力という餌を与え、それによって生まれる力を術式で動かすというものだ」

なるほど……魔術とは違って、術式と術者の間に精霊が入るのか。

「少し違うが、バイトと似たようなものだ。魔力という給金を精霊という均質のバイトに与え、術式という仕事をさせる。ついでに言うと、魔力が多い方が多くの精霊を雇えるから、より労働力＝威力も上がると言う訳だ。もっとも、バイトが多いならそれを上手く指揮出来ないとかなりのロスが出るがな」

「ついでに、人数に合わせた仕事でないと、比較した際に効率が悪かったりするんじゃない？」

説明に続けた問いに若干拗ねた表情をするエヴァだけど、すぐに不敵な笑みを浮かべた。

すぐに理解するから教え甲斐が無いと思ったけど、逆に考えると優秀だからこそ詰め込めるだけ詰め込めるんじゃないか……とか思ったんじゃないかな。

「その通り、基本魔法より高位魔法の方が同量の魔力を使ったなら効率がいい。当然、それ相応の必要量はあるがな。まぁ、適正量というものだ」

まぁ、そうでなかったなら高位魔法の価値が無いよね。

「で、次は魔法詠唱についてだ。魔法の詠唱は、始動キー、詠唱式、発動キーで成り立っている」

「始動キーで精霊に働きかける用意をして、詠唱式で術式を伝えて、発動キーで発動させるのかな？」

僕の言葉にエヴァは少し考え手から口を開く。

「概ねその認識でいいが、詠唱式は術式伝達の補助だ。実際は、自身の精神力を使って精霊に命令を伝達している」

「詠唱が補助でしかないなら、無詠唱とかでも魔法は使えるのかな？」

魔術では、使う魔術が固有結界の派生であるエミヤのような特殊例でもないと、無詠唱は難しいけど。

「それは無詠唱呪文と呼ばれる技法だ……発動キーは唱える必要はあるがな。完全無詠唱も出来ない事は無いが、とてつもなく効率が悪い。過不足なしに発動できる可能性があるのは武装解除の呪文ぐらいか」

「なるほどねぇ」

でも、武装解除は武装を判断する必要があって、結構難易度が高いと思うんだけどな。

「何を不思議そうな顔をしている？」

「いや、武装解除って難易度高くない？」

エヴァは常識外な事を言われたように固まり、すぐに納得したように頷く。

「ああ、武装だけを排除するならそうだろうな。実際は来ているもの、持っているものを全部吹っ飛ばすだけの呪文だが」

「なにそれこわい」

難易度低くて使いやすい＋敵の戦力を容易く下げられる＝戦いで多用される。

なんとも恐ろしい方式である。

「おい、なんでそんなに戦慄しているんだ？」

「戦場って、いろいろな意味で怖いところだね……」

何を言ってるんだこいつはという表情をしていたエヴァだが、待てよというように考え始め、僕と同じ結論に至ったのか、顔を引き攣らせた。

「確かに恐ろしいが、実際そうなることは無いから安心しろ。多分、暗黙の了解というやつだ」

「よかった……ホントによかった……」

精神ダメージで死にかねない戦場は無いと判明し、心底安心した僕だった。

「あー……実践にするとしよう。今回は基礎魔法の『火よ灯れ』だ」

エヴァは、空気を変えるためか講義を終え、実践に移ることにしたようだ。

「こいつは詠唱式はいらん魔法だ。始動キーは練習定番の『プラクテ・ビギ・ナル』でいいだろう」

「了解。じゃあいくよ……『プラクテ・ビギ・ナル』『火よ灯れ』」

欠片も火が出ることは無く、見た目では全く変化はない。

「失敗か」

「うん、失敗だね。でも、コツは掴んだから次は多分成功するよ」

特に魔力の感覚を教えられるでもなく実践に移ったけど、発動媒体である杖を持って呪文を唱えるということが重要だったようだ。

それを行うことにより微量ながらも魔力が動いたことで、魔法発動の感覚というものを覚えることができたからだ。

「じゃあ、いくよ……『プラクテ・ビギ・ナル』『火よ灯れ』」

ゴォォォォォォ……。

「……」

「……」

杖を向ける方向を間違っていたら、城とか森とかが無くなったであろう『火』が空に消えた。

「……」

「……」

その消えた方向を見る僕とエヴァ。

「……」

「あー……あれでもかなり加減したんだけど」

じと目で見てくるエヴァに言い訳してみる。

実際、これでもかというぐらい魔力を抑えて使ったつもりだ。

「ごめん、エヴァが手本見せて……でないと、どの程度に加減すればいいのか分からないや……」

「そうだった……そうだったなお前は。世界を軽々操作する奴にとって、私たちレベルの魔力程度では原子ぐらいの小ささだろうな……このチートめ」

エヴァの言葉に、自分のスペックを真剣に考えてみる。

今までの魂のスペックの累算＋それに引っ張られて最高スペックの現世の自分＋魂だけだが、世界から外れた存在である（上位の論理性）＝バグとかチートとかが生ぬるい何か。

僕が倒せないって言うのは、僕の知らない概念の存在か、僕と同じく世界を外れた、越えた存在だと思う。

「多分チートじゃ生ぬるいかも……」

「そーか」

ちょっと訂正――心底どうでもいいというようにエヴァに扱われると、僕は簡単に倒されそうです（逆に萌えさせられてもやられそう）。

「兎はね、寂しいと死んじゃうんだ……」

「それは飼い主が世話しないから、病気になりやすいって話だろうが」

いや、そういう誤解だっていうのは知ってるよ。

かまっていう揶揄なんだけど……分かっててスルーしてるよね？

しゃがみ込んで床にのの時を書いてみたんだけど……ジト目で呆れ顔のエヴァに耐えられなくなり、いじけモードから復帰する。

ただ、このまま負けっぱなしなのもしゃくなので――

「まぁ、有象無象じゃなくてエヴァにかまってもらえなきゃ意味無いんだけどね」

「ふ、ふん！　そんな事当然だろう！」

前までのように凄い反応は無いけど、わずかに頬を染めて目線を外すしぐさが可愛すぎる。

萌え死に……本当にするかも。

過ごした年月の割に、僕もエヴァも初心すぎる。

「ふふっ」

「んなっ……笑うなこのバカ！」

つい噴き出してしまい、エヴァに怒られる。

「ごめんごめん。お互い初心だなって思ってさ」

「うぐ……確かにそうだ……かたや約６００歳、かたや年齢測定不能というのにな……ははははは。しかもナギが初恋とか、ほとんど化石みたいなものじゃないか……」

あ……今度はエヴァが沈んでしまった。

「大丈夫だよエヴァ。精神は肉体に影響されるって言うし、僕から見ても断然若いよ」

「そ、そうか？　いや、こいつから見れば誰でも若いはずだから……」

少し気を取り直したと思ったら、さらに深く沈んでしまった。

うーん、言葉で言うより、態度で示すのがいいかな？

そんな言い訳と共に、後ろからエヴァに抱き付く。

「……こんなロリババァ相手にするより、もっと若い奴らを相手にしたらどうだ」

「ばーか。さっきも言ったけど、有象無象なんかに好かれるより、エヴァに好かれたいんだよ」

僕の言葉を、エヴァは軽く鼻で笑う。

だけど、その手は僕の手を引き寄せて、さらに強く抱きしめさせてきた。

「まぁ……嫌いではない」

「うん、今はそれでいいや」

抱きしめを少し強め、腕の中の温かみを噛みしめた……恋と共に生まれた愛を大きくし。

――第四章　「今のは『燃える天空』じゃない……『火よ灯れ』なんだ……o

息抜きと宣言していたとはいえ、間を開きすぎたかなと反省。
今回は、慧がネギ世界の魔法を使用したわけですが……はい、大火力ですね。
実は、魔法発動体を介して魔法は使っていません……杖、壊れちゃうもんね。
これは慧の癖で、今までに杖は単なる振りでしか使っていなかったおかげです。

話は変わりますが、慧はエヴァに愛を感じ始めました。
今までは恋ばかり高く、それ比較して愛が少なめでしたが、今は同程度です。
カモの好意表でいえば――

	友	親	恋	愛	色
以前	14	10	20	10	8
現在	16	12	20	19	5

＊各20点満点
――こんな感じです。
恋のカンストは当然としてw
愛は、エヴァのことを知り始めてきて愛しさを感じ始めています。
自分的には、恋は恋人、愛は夫婦や家族って感じです。
なお、色が少ないのは、今は恋愛に忙しいからです。
そういう関係になれば、自然と伸びます。
やたらとスキンシップをとりたがっているのは、無意識に感じている喪失への不安のせいです……書いてて、慧に超申し訳なくなってきた……。
では、また次回に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3523r/

ネギま流魂記

2011年10月7日00時58分発行